

大草谷津田いきのもの里 自然観察会

ドングリころころ、どこ行った？

佐野 由輝（大網白里間町）

日 時：2012年11月4日（日）10：30～12：00 天候：晴れ

参加者：20名（大人11名、子ども9名）

担当指導員：岡田敬子、佐野由輝

今回の参加者は小さな子どもが多かったので、観察前から大興奮。ドングリを拾ったり、カマキリが電灯の柱を上っている様子を観察したり、スギの木の空洞をのぞき込んだりと、いろいろな物に興味を示していました。

そんな中、観察会がスタートしました。まずは、入り口付近にある代表的なドングリである、シラカシとコナラ、クヌギの形、色、大きさを見比べ、その違いを観察しました。一口にドングリといっても、種類によって全然違うことに、みんな驚いていました。

続いて、落ちているドングリをよく観察すると、根が生えているドングリを発見しました。さらに、土手を良く観察すると、明るい場所を好むコナラの稚樹がたくさん芽生えていました。これが全てドングリの赤ちゃんだと知るとみんなびっくりしていました。でも、たくさんのどんぐりが地面に落ち、たくさんの芽生えても、その大半は数年の命、長寿を全うできる樹木はほんの一握りです。

次に、観察路を進みむと、今度は、暗い林床にたくさんのシラカシの芽生えがありました。シラカシは暗いところでも、芽生えます。お母さんと思われるシラカシの大木が高い場所にあったので、ドングリが坂をころころ転がって来て芽生えたのかなとみんなで想像しました。

暗い森を過ぎ、谷津田の歩道を歩くと、コナラが、林縁から谷津のほうに長く幹や枝を張り出していました。どうしてこんな姿になったのか聞いてみると、子どもたちから「土、水、風」とコナラの気持ちになって、いろいろな答えが返ってきました。コナラは、日なたが好きな木なので、太陽を求めて明るい方に枝を伸ばしたと説明しました。本当のところは、コナラに聞かないと分かりませんから、子どもたちのほうが正解かもしれませんね。

今度は、足下に注意してもらい、穴のあいているドングリや枝ごと落ちているドングリを探してもらいました。枝ごと落ちているドングリは見つかりませんでしたが、穴のあいたドングリはたくさん見つかりました。割ってみると、幼虫の入っているドングリも見つかりました。穴をあけた張本人はゾウムシで、ゾウムシのお母さんが柔らかいドングリに穴をあけてタマゴを産むということを、絵本を使って説明しました。

最後に、スダジイの木の下で、昔は人間にとってドングリが貴重な食料であったことを説明した後、ドングリだけで生きていくためには何本の木が必要かを計算するために、子どもたちにドングリを100個集めてもらいました。そして、ドングリの重さを量り、木に何個のドングリがなるかを予測して、計算した結果、人間1人が1年間生活するためには、240本のドングリが必要であることが分かりました。すると、子どもから、「ゾウムシも食べるよね」と鋭い指摘がありました。確かに、ドングリは人間だけの物ではない。他の動物たちのことを考えるともっとたくさんの木が必要ですね。

ドングリと人間と動物との関わりを実感しながら、観察会を終わりました。